
運命の国

雷歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の国

【Nコード】

N3956Q

【作者名】

雷歌

【あらすじ】

キノの旅の二次創作小説です。原作と多少かする部分もあります
が、作者の妄想でもあります。そんな駄作を読んで頂けると、月並
み以上に嬉しいです。

荒れ果てた草原の中を、一台のモトラド（注：二輪車。空を飛ばないものだけをさす）が走る。

それにまたがるのは一人の旅人。年は十代半ばといったところで、短い黒い髪の上からたれの付いた帽子をかぶっている。精悍な顔立ち、ゴーグルの下でも分かるほど。土色のコートの下には黒いジャケットを着て、腰でベルトを締めている。コートは時々翻り、右腿に吊るしてあるリヴォルバータイプのハンド・パースエイダー（注：パースエイダーは銃器。この場合は拳銃）が覗く。旅人はこれを『カノン』と呼んでいる。

「ねえ、キノ。これから行く国は、どんな所なの？」

不意に少年のような声が運転手の旅人に話しかけた。それにキノと呼ばれた運転手が答える。

「えーとね、『運命の国』だって聞いてるよ」

「運命の、国？」

「ああ。運命の国」

「どういう意味なんだい？」

「さあ。それはボクにも分からないさ、エルメス」

そう会話をしながらモトラドと旅人は走って行く。

「すみません。この国に入国したいのですが」

そう言ってキノが城壁の前にある入国審査所に入る。

「はい、はい。今いきまーす」

奥から間延びした声が返ってきた。そこは質素な造りの部屋で、しかし木造の部屋は気分を落ち着かせるものがあつた。キノは部屋に二つしかない椅子の一つに座つた。

「すみませんねえ。旅人さんなんて、珍しいものでして…ね」

そう言いながら出てきた青年は、スパナを持っていた。そして彼のもう片方の手には怪しげな機械があつた。キノが物珍しそうにそれを見ていると、「ああ、これはね」と言つた。

「これは、この国への入国審査のための機械ですよ」

そう言って差し出されたものは、どうやら頭にかぶるものらしくヘルメットのような形をしていた。

「それでは、それをかぶつて下さい。そして、かぶりながらこの紙に必要事項を記入して下さい」
「ええ、分かりました」

そう言つて記入を始める。

——名前

——キノ。

——滞在期間

——三日間。

——滞在人数

——人間一人。モトラド一台。

——今まで訪れたことのある国

——…いくつか。

——今までで一番印象深い国

——…全部。

キノは意図を捉えられない質問に、次々と答えていく。その間も頭の上でキュルキュルと不快な機械音が響いていた。

全ての質問に答えたキノは、はい、と青年に紙を差し出す。

「はい、ありがとうございます。では三日間の滞在、ごゆっくりお楽しみください」

そうして国への扉が開いた。国へ一步入った瞬間、キノは足を止めた。

そこは、キノが見たことのある景色だった。

「どうかした、キノ？」

エルメスが不安そうに尋ねてくる。

「いいや、どうもしないさ。ただ少しだけ、見たことあるような景色だったものだから」

「そう？じゃあ早く行こ？あっちに宿の看板がある」

「ああ、そうだね。おなかが空いたよ」

「キノの食いしん坊」

「はぁー、やっぱり白いシーツは気持ちがいいなあ。久しぶりのシヤワーもさっぱりしたし、ね」

キノは真つ白なシーツのかかった、ふかふかのベッドに飛び込んだ。

「キノー。まだ寝るの早いよ〜?」

眠りに落ちかけていたキノにエルメスが話しかける。そんなエルメスに、キノは「もうちょっとだったのに」と言った。

「いいかい、エルメス? 前にも言ったことがあるけど、ボクはふかふかのベッドと白いシーツには手も足も出せないんだ。なんだか、無…しょ……に、眠…く………」

そのままキノの声は聞こえなくなった。代わりにエルメスに聞こえてくるのは、規則正しい寝息だけだった。

「あーあ、寝ちゃった…」

エルメスの声は、誰にも届くことは無かった。

真っ赤な、真っ赤な花がたくさん。名前は覚えていないけど、きつとつままない名前だったと思う。キノはふかふかの花畑に仰向けに倒れた。風が運ぶ甘い香りは、時々キノの鼻をくすぐった。空を舞う赤い花びらは、キノの上へはらはらと落ちた。それでもキノは寝転がったまま、目を閉じ澄んだ空気を吸っては吐くの繰り返しだった。そして想像する。真っ赤な花の中に人間が一人寝転がっている。

真っ赤な、花の、中に――

その瞬間キノの脳裏には、一つの光景がプレイバックされる。真っ赤な中に人間が一人。

真っ赤な血の海に人間が一人。

キノはバツ、と起き上がる。そこは、質素な宿屋の一室だった。自分を包むのはふかふかの布団。微かに花の香りがした。

「太陽が、昇っている」

キノが起きるのはいつも、太陽と同じ頃。しかし今は既に昇っていて、窓から部屋に朝日が差し込んでいた。

「おはよう、キノ。今日は起きるの遅かったね。変な夢でも見た？」
「…ああ、エルメス。嫌な夢を見てしまった。とっても、とってもね」

「ふーん。それで？今日はどうするのさ？外へ出てみないのかい？」
「そんなわけ無いだろ、エルメス。ボクらには素敵なガイドさんがいるじゃないか」

「ああ、あの子ね。もうすぐ来るんじゃない？」

ガイドさんのあの子とは、この宿の娘さん。年は十一歳で、とてもしっかりしている可愛らしい少女だ。昨日旅の話をしてあげたら、お礼に町を案内してくれると言っていた。

ちょうどキノが準備し終えたところに、コンコン、と扉を叩く音がした。

「旅人さーん。入っても平気ですかー？」

外からあの少女の声がした。キノが「どうぞ」と言つと、きい、と音を立てて扉が開いた。

「旅人さん、どこか行きたい所ありますか？」

「いいや、君に任せるよ」

そう言つと、少女は顔を輝かせて笑った。

「では、ワタシのお勧めの場所をまわりましょう」

外に出ると、色々な人に出会った。楽しそうに遊ぶ子供たち。大人はみんな仕事をしていたが、その表情は楽しそうに笑っていた。

「…ここでは、みんなが幸せそうだね」

「え、ああ、そうですよ。みんながみんな幸せなんです。子供はずっと遊んでいられるし、大人も仕事を乐しみます」

「へえ」

すべての町の人々が笑顔なのに対して、ガイドの少女はあまり楽しそうではなかった。

「えっと、無理してガイドしてくれなくても良いよ？」

「そうだよ。キノにかまっていなくて、遊んできたなら？子供はずっと遊んでいられるんでしょ？」

少女の様子を気にしたキノの言葉に、しかし少女は「いいえ」と言った。

「いいえ。もうすぐ子供じゃなくなります。ワタシ、明後日で十二歳になるんです」

キノには、思い当たることがあった。

「へえ、十二歳っていったら、キノが旅を始めた頃じゃない？」
「…ああ」

エルメスはKY^{くつきょめな}ぶりを発揮している。

「この国では、十二歳から大人で、仕事をするんです」

少女の一つ一つの言葉に、キノの心臓はドクン、ドクン、と高鳴っていく。

「仕事を始めるには、仕事を楽しめるようになってはいけませんん」

ドクン、ドクン、ドクン

「仕事を楽しむには、手術をしなければいけません」

少女の言ったその言葉に、キノは歩いていた足を止めた。

「キノ？どうかした？」

「旅人さん、大丈夫ですか」

二人の心配した声は、キノには届かなかった。その表情は青ざめていて、そして驚愕に満ちていた。

——十二歳から、大人。大人は、仕事。仕事は、楽しむ。楽しむには、手術。

キノの頭には、それらの言葉が繰り返されるだけだった。

——人は誰でも空を行く鳥を見ると、旅に出たくなるんだそうだ

——嫌なことをできることが、ちゃんとした大人なのかな

——僕は旅をしている。で、君の好きなことは？

「…ノ、きの、キノ！」

叫んでいるエルメスの声で我に返った。いつの間にか握っていた左拳は、汗でいっぱいだった。

「旅人さん、少し休みますか？」

心配してくれた少女は、公園の方に連れてきてくれた。広場では子供たちが仲良く遊んでいた。噴水の水は太陽の光を反射してキラキラと輝いている。静かな時間が流れた。

キノは思いついたように少女に話しかける。

「……そういえば、話の続きだったね。ここでは、大人になるには手術をするのかい？」

「はい。生きていくためには仕事をしなければダメです。仕事は、つらいものです。それを笑顔でこなします。そのための手術です」

「…大人は、好き勝手に生きていくことはできない。子供と違って手術を行えば、嫌なことでもできるちゃんとした大人になれる」

キノは静かに続けた。

「仕事である以上、やりたくないことでも、間違っていると思うことでもやらなければならない」

「何故知っているんですか、旅人さん？」

「そうだよ、キノ。何で？」

ガイドの少女は不思議そうに、エルメスは好奇心まる出しで尋ね

てきた。

キノは少し逡巡して、答えた。

「噂で、聞いたことがあるだけだよ」

宿に戻って、夕食を食べた。その後はシャワーを浴びて、部屋に戻った。

——大人、か…

少し、考える。エルメスも、今は静かだ。

君のひとみ 世界映す鏡

いつも 優しさを忘れずに

悲しい 言葉胸に満ちても

まなざし 強く星を見つめて

とても上手な歌声が聞こえてくる。テノールの、優しい歌声。

この声は、キノには聞き覚えがあった。

驚きで窓の外を見る。そこには、一人の青年がいた。年は二十代くらいで、とても優しいまなざし。

「キノ！」

キノは急いで外に出た。もう月が昇っていて、月光が町を照らしている。そこに、一人の青年が立っていた。

彼はキノに気がつくと、ニコツと笑って歩み寄ってきた。

「久しぶりだね。君は、もう『大人』なのかい？」

久しぶりに聞く、心に染みるような声。もう聞くことのできないはずだった声。

「僕はキノ。世界中を旅してまわっている。君は？」

キノの人生を変えた青年、キノ。

「ボクは——ボクは『大人』じゃないよ。『子供』でもない」

キノは静かに続ける。

「ボクは、キノ。あちこちを旅しているただの旅人」

キノがそう言うと、青年は笑った。あの時と同じ優しい笑顔だっ

た。

「やあ、キノ。君は人生を、楽しめているかい？」

「ええ、とても」

「そうか。エルメスはどうだい？」

「同じく」

「良かった」

青年はそう言って去ってしまった。キノには、引き止める術がなかった。

「キノ、どこ行ってたのさ」

戻るなりエルメスが怒鳴った。こんな時に、と。

「何があつたんだい？」

「あの子が、手術を拒否したらしい。そしたら――」

「そしたら親が、彼女を殺そうとした」

「そう！…なんで知ってるの？」

「んー、勘？」

「それだけじゃない。彼女が殺されそうになったとき、変な男の人が変わりに包丁で刺されたんだよ」

「……………」

「それで、殺されそうになった彼女は…」

エルメスがそう言ったあと、エルメスの後ろから少女がおずおずと姿を現した。

「ここに逃げてきたわけね」

「……………」

少女は小さく頷いた。今にも泣きそうな顔でキノに抱きついてきた。

「ど、どうしよ…し、らない、男の人、が…」

「……………」

キノもエルメスも慰めることはできなかった。彼らは二人とも、無責任なことと言えない、言わない性質だ。

ひとまず、ベッドに座らせて落ち着かせる。

「一つ、君にお話をしてあげる」

「え…？」

「昔むかし――」

そこまで言うほど昔でもないむかし。ある一人の女の子がいました。彼女は、自分の名前が花の名前で読み方を変えると、とても嫌な悪口になるので嫌いでした。

ある日彼女が住む国に、旅人がやって来ました。彼は背が高く痩せていて、歩いてやってきました。

「こんにちは、ボクはキノ。あちこち旅をしているんだ。君は？」

彼は独りでいる彼女に話しかけてきました。彼女が嫌いな自分の名前は、キノと名乗る旅人には教えませんでした。

「…失礼だったかな…。この国に、宿屋はないかな？ちょっと安くて、シャワーがあるといいんだけど」

「うちがそうだよ」

キノが言った言葉に、彼女はすぐに反応しました。彼は三日間、明後日まで二晩泊まると言いました

そして、彼女は国を逃げ出しました。一台のモトラドと一緒に」

キノが話の最後にそう締めくくって終わった。

「……………」

少女は黙ったままだった。そんな少女の様子を見て、キノは言葉を続けた。

「彼女は、不幸だったと思うかい？自分の国に居られなくなったことが」

「それは……」

少女はキノの方を見ながら口ごもった。さすがに、どんな話を理解できている。

「彼女はね、幸せだよ。いろんな国を見て、いろんな人と会って、いろんなことを知った。それは自分の国に居るよりも幸せだ。意味のない『大人』になるよりも、ずっとずっと、幸せだ」

キノのその言葉を聞いて、少女は口を開いた。

「…それが『彼女』^{あなた}の答えですか？『彼女』^{あなた}はその『運命』を受け入れるのですか？」

少し困った様子のキノだが、言葉を返した。

「ああ。それが『彼女』^{ボク}の答えだ」

「そうですか」

少女はそう言って、部屋の外へ出て行った。

キノはエルメスに話しかけた。

「ねえ、エルメス。珍しく静かだったね」

「……初めて聞いたよ。その話」

「やっぱりエルメスはそこまで覚えていなかったね。どこから覚えているんだい？」

「男の人が包丁で刺された所くらい、かな」

「ふーん」

二人の会話の後には、静寂しかなかった。

滞在三日目の朝、キノは夜明けと共に目覚めた。『カノン』と自動式のパースエイダー『森の人』の整備をし、いつもの抜き打ちの練習をする。

それが終わった後、キノはエルメスを起こした。

「朝だよ、エルメス」

「ん、おはよう、キノ」
「おはよう」

そうして朝食をとるために宿の食堂に行くと、そこには出来立ての朝食が置かれていた。人の姿は見えなかった。

外に出ても人影はなく、キノとエルメスは出国のために門へ向かった。

「…どうしたんだろうね、キノ」
「分からないのかい、エルメス。彼らはもう、仕事を果たしたんだよ。だから居ないのさ」
「どういうこと？」

走りながら、キノはエルメスを一度見て、「つまりね」と言った。

「つまり、これは彼らの一種の『伝統』と言って良いんじゃないかな？少し趣味は悪いけどね」

「だから何なのさ？」

「だから、今までボクらが接してきた彼らは、この国の住人。彼らはある目的のためにこんな行動をしているのさ」

「ある目的って？」

「それは——それはね、人々が人生を楽しめるようにしていることだよ。彼らはこの国を訪れるすべての人間の人生の、いや、人生の岐路に立ったときの状態を、客観的に見せてくれる」

「それが人生を楽しむこととどう関係があるのさ？」

「それはね——」

「それは、その人の一番の後悔をぬぐうことです」

門に着いてキノがエルメスから降りながら言いかけた言葉に、別の声が続けた。その声は、聞いたことのある青年の声だった。

「旅人さん、三日間のご滞在はいかがでしたか？」

入国審査のときの青年だった。彼は優しく笑いながら、静かに言った。

「旅人さんは、何故分かったのですか？これが我々の虚劇ひそじだと」

微塵も不思議そうな様子を見せない青年が言った。

「そうですね…強いて言うなら話が出来過ぎです。それに、所々違う部分がありました」

「あなたの記憶と、ですか？」

「ええ。ボクの記憶の中では、彼は歌が下手くそでした。とっても、とっても」

「そうですか。あなたの後悔は、ぬぐわれましたか？」

「はい。とてもきれいに」

「それは良かったです」

青年が笑いながら言った。

「それでは、出国のために門を開きますね」

「最後に一つ、良いですか？」

「どうかした、キノ？」

「何でしょう？」

「どうしてあなたたちは、こんなことをしているのですか？」

「…それは――」

ブロロロ、とモトラドが音を立てて走り出す。来た時とは違って、きれいに整えられた道があった。

キノは小高い丘の上に止まりゴーグルをはずして、あの国を見下ろした。

「ねえ、キノ。彼らは、幸せなのかな」

「さあね。ボクには分かりかねるよ」

「そうだね」

「ああ、彼らにどんな過去があろうと、旅人の記憶を勝手に見るのはいただけないね」

「見られなくなかった？」

「どうだろうね」

「キノ、逃げたね」

「……」

キノは再びゴーグルをかけ、モトラドは走り出す。

『最後に一つ、良いですか？』

『何でしょう？』

『どうしてあなたたちは、こんなことをしているのですか？』

『それは、我々に後悔があるからです。その所為で我々は苦しみ、悩んでいました。しかしある日、その話を聞いてくれたある教祖様が、言ってくれました。「それは、あなたたちが悪いのではありません。それこそが『運命』だったのです」と。しかし『運命』と割り切るには、我々は苦しみ過ぎました。そこである日思いついたのが、記憶の操作です』

『記憶の、操作？』

『はい、記憶の操作です。それを『運命』と割り切れない者は、みな記憶の操作をしました。その後は簡単です。これが我々の伝統になったのは、たくさんの人を苦しみから、過去の後悔から救いたいと思う者が増えました。だからこの国を訪れる旅人さんの記憶から後悔を探し、それを『運命』と受け入れられない方には、少しの記憶の操作を行いました。その方たちはみな、幸せそうに出国されていきました』

『…そうですか。ありがとうございました』

『いいえ、どういたしまして。旅人さん、お元気で』

『はい。あなたたちもお元気で』

運命を大切にし、運命を運命と受け入れるために生きているから、

『運命の国』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3956q/>

運命の国

2011年1月28日16時25分発行